

図書館を空間としてよりオープンに

C1240084 安達一葉

これまで以上に利用したくなるような図書館を検討する。

- ① 事前に班ごとで考えた質問を5人の先輩それぞれにインタビュー形式で実施した。また、実際に図書館を利用しながら他の利用者の様子をうかがう観察も加えて行った。
- ② インタビューをしていく中で明らかだった図書館、ひいては自習スペースに求められる顕在的ニーズが2つある。1つ目が邪魔にならない程度の雑音があること。2つ目が飲食可能であることだ。特に雑音問題はほとんどの先輩方が挙げていた。2つ目は飲食可能にするだけで解決するだろう。次に先輩方の発言等から私が考察した潜在的ニーズが、図書館という空間がオープンであるということだ。私は松尾先輩がおっしゃっていた周りに自然がある環境がいいという意見に着目した。自然があるところがいいということはつまり自分がいる空間が閉鎖的であると疲れてしまうということだと解釈できると思った。しかし、ただ開けているスペースがいいということではない。加藤先輩や今野先輩はどのようなスペースがいいかを問われた際に人に邪魔されないところと答えていた。つまりオープンなのはあくまで図書館という空間そのものであり、自習スペースや机はある程度閉塞的であることが求められていると考えた。
- ③ 私は先輩たちの意見を踏まえ図書館をよりオープンな空間にすることをコンセプトにした。

図書館を空間としてよりオープンに

それを満たすプロダクトとして図書館入り口の壁をガラス張りにすることと、1階の本棚を減らし2階の大きいテーブルがあるスペースに移動することを提案したい。

- ④ 入り口の壁をガラス張りにすることによって視覚的に開けた空間に見せる効果が期待できる。またそれに加え、人間の他者がいる所に集まりたくなるバンドワゴン効果も同時に期待でき、中にいる人を外から見やすくすることによってさらに多くの人を集めることができると考えた。より多くの人を集客することで静かすぎても集中できないというニーズも同時に満たすことができる。これは酒田駅前に位置する「ミライニ」をイメージした。また実際に図書館を利用してみて1階の本棚が多すぎて閉鎖的な空間になっているように感じ、本棚を減らすことでより開けた空間にできると思った。2階を観察していたところ部屋の中央にある大きいテーブルと複数の椅子がある空間の利用者が極端に少なく、奥の閉塞的な一人用の机に利用者が集中していることに気がついた。この傾向を利用し中央のテーブルがあった場所に1階のいくつかの本棚を移動させ、余った空間に一人用の机を増設させることで1階をよりオープンにし、2階の満席を避けられると考えた。1階は1つ1つの本棚が目立つようなレイアウトに変更し、新書など関心の高い書籍を掲示すれば学術的な硬い雰囲気ではなく、図書を娯楽として捉える「読書スペース」としてもオープンな空間にできると考えた。